

ネット上に「移動ドで楽譜を読み、自分で歌えるように」なる為の分かりやすい解説が載っていましたのでここに掲載します。出典はHN : Kokecola さんの次のサイトです。

<http://music.geocities.jp/kurogomaetmikan/index.html>

シリーズものなので、関連部分だけを取り出し転記しました。内容の項目は次の通りです。

- | | |
|----------------|--------------------------|
| ① 前回までのまとめ | ⑦ この先の書き方 |
| ② 「移動ド」で楽譜を読む | ⑧ 臨時記号への対応 |
| ③ なぜ移動ドを使うか | ⑨ 蛇足：ダブルシャープ、ダブルフラットの意味 |
| ④ 移動ド読みから初見演奏へ | ⑩ 高度な応用：相対読み(ある程度わかる人向け) |
| ⑤ 移動ドが効く理由 | ⑪ 補足：移動ド～ドの位置のを見つけ方 |
| ⑥ 具体的な練習手順 | |

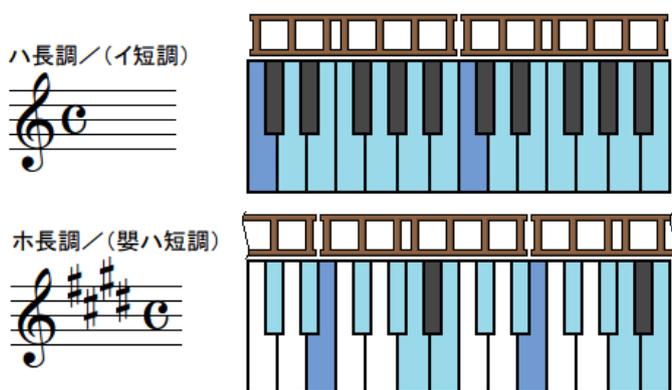
[①前回までのまとめ]

前回までの話をまとめます。

- ★1 現代の音楽は1オクターブを12分割した音列から作られる。
- ★2 その中でも大部分の音楽は12の音から7つを抜き出した「ドレミファソラシド」の音列から作られる(短調＝ラシドレミファソラはひとまずこの派生としておきます)。
- ★3 「◆○●■○●○●■ — ◆と■は弾く鍵盤(◆が「ド」に当たる音列の最初の鍵盤)、○は空ける鍵盤」の順で音を並べれば「白い鍵盤だけのハ長調」じゃない並びでも「ドレミファソラシド」に聞こえる。それは人の耳が「音の間隔」を感じられるため。次のようなハシゴをイメージするとよい。



“長調”のハシゴ



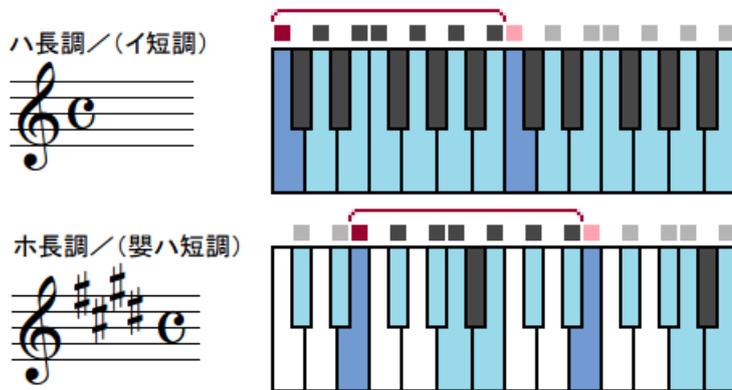
使う鍵盤が水色、音列の開始の音が青。ハシゴの位置は鍵盤の種類分(12段階)スライドできる。

- ★ この配置の様相が一緒なら、音列のスタート位置(◆に当たる鍵盤)はどこでも良い。このスタート位置の違いというのが調の違いで、選択肢は12種類ある。

[②「移動ド」で楽譜を読む]

移動ドは楽譜の読み方のひとつです。

上記のまとめにあります「■●○■●○■●○■」(■は弾く鍵盤、○は空ける鍵盤)の規則に沿って音を並べれば、大抵の人はどの鍵盤から始めても「ドレミファソラシド」という音の列に聞こえると思います。スタート位置をどこにするか、というのがいわゆる「調」の違いです。



スタートの音(長調の基音)が濃い青。使う鍵盤こそ違いますが、上のマークを見ればわかるように同じ規則で並んでいる。

移動ドというのはどの調であってもこのスタートの音を「ド」として読む方法です。今回は例として"ハ長調"と"ホ長調"を出していますが、もちろん12種類どの鍵盤からでもスタートすることができます。

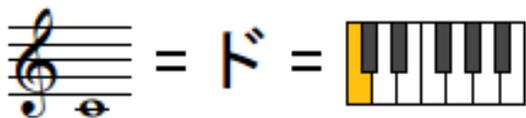
※補足 短調＝ラシドレミファソラ の場合、音列で「ラ」に当たる音を「ド」と読む流派もあるらしいですが、このブログでは長調と短調で読み方は区別せず長調の音列の最初を「ド」とする方法で説明します。



ハ長調とホ長調の場合の例。上段が「固定ド(後述)」読み、下段が「移動ド」読み。

[③なぜ移動ドを使うか]

この移動ドの読み方をはじめて聞く方はなぜそんな読み方をするのか疑問に思うかもしれません。なぜなら、学校の音楽の授業で、あるいは小さい頃音楽教室に通った人は



と教えられ、ずっとその読み方を)使ってきたからです。

この音楽の授業で教わった読み方を「固定ド」といいます。「移動ド」は調に合わせて「ド」と呼ぶ鍵盤が移動するのに対し、「固定ド」は「ド」と呼ぶ鍵盤を固定しているからです。

ではなぜ、その慣れ親しんだ読み方を使わずにあえて移動ドという読み方を使うのでしょうか。

移動ド最大の特徴は、旋律の形が同じなら調が違っても読み方が一緒ということです。

固定ドが個々の音の高さを1つずつ指定する読み方であるのに対し、移動ドは個々の音の高さではなく旋律の形を指定する(前の音から次の音への移動距離を指定する)読み方です。

上の例で「ドレミファソラシドに聞こえる音列」を「ドレミファソラシド」と読むことから類推できると思います。固定ドだと「ドレミファソラシドに聞こえる音列」でも調によって読み方が違いますね。

絶対音感がない限り普通の人の耳には「音の絶対的な高さ」が分かりません。しかし「音の距離・旋律の形」を感知する能力は誰もが持ち合わせているものなので移動ドが有効なのではないかと思われます。

※註:「移動ド」と「固定ド」どっちが良いか...という議論がありますが、歌のように音符を頭の中で音に変換する必要がある場合、音の間隔を利用した「移動ド」が有効に働くと思います。それに対して楽器など物理的な操作で音を奏でる場合には「固定ド」が有効だと思います。楽器は調によって機構が変わる、ということがありませんので(楽器自体を調に合わせた物に持ち替えるなどはありませんが)。両方の読み方を理解して、自分で使い分けられるのが良いと思います。

[④移動ド読みから初見演奏へ]

例として「赤とんぼ」に移動ドを適用してみます。次の譜例は2種類の調で書いた「赤とんぼ」の冒頭です。

へ長調 ド ファファ ソ ラドファレド レファファ ソ ラ
ソドド レ ミソドラソ ラドドレ ミ

ホ長調 シ ミミ ファ ソシミドシ ドミミファ ソ
ソドドレ ミソドラソ ラドドレ ミ

五線の上書いてあるのが固定ド読み、下書いてあるのが移動ド読み。移動ド読みは同じメロディーならキーが違って読み方が一緒になる。

移動ド読みと固定ド読みを比較してみてください。五線の上書いてあるのが固定ド、下書いてあるのが移動ドです。

「移動ド読みを楽譜に書くときどこの音符がドになるか」は別記事で補足を書きましたので参考にして下さい。

鍵盤で弾いてみるとわかりますが、調は違って同じメロディーですね。

このように固定ドは同じ旋律でも調によって読み方が変わります。一方移動ドは調が違って旋律が一緒であれば読み方が一緒です。

[⑤移動ドが効く理由]

よほど臨時記号の多い厄介な曲でもない限り、大抵の旋律は **ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド** の7種類の音の組み合わせからできています。赤とんぼの例だと「ソ↑ド」「ド↑レ」「レ↑ミ」「ミ↑ソ」 etc...の組み合わせからできていますね。

移動ドで歌う練習を重ねると、これらの組み合わせ^{※1}を体が覚えてきます。固定ド読みと違い、「**同じ読み方なら距離は同じ**」ですからそうなればもうしめたもの、初見の楽譜でも「次の音へ移動する」こと、すなわち楽譜を見て歌うことができるようになります。

※1: この組み合わせは数学的に計算をするとけっこう数が多いのですが、徐々に感覚がつかめてきますのでそこまで心配する必要はないと思います。

ル」ですが、ファ「#」と読んでいます。答えは「デフォルトの音からの上下で考えるから」。

例えばこのb 3つの調（変ホ長調=Es-Dur）ではAの音に最初からbが付いてA bになっています。つまり、このナチュラルは「デフォルトの音から」半音上げる役割をしているのですね。このように移動ドではデフォルトの音から半音下げる記号を「b」と考えます。

同様に、#が付く調で「デフォルトで#が付いている音」にナチュラルがあつたらそれは「b」と読んでください。

[⑨蛇足:ダブルシャープ、ダブルフラットの意味]

よく「存在意義が分からない^[*2]」と言われる記号にダブルシャープ、ダブルフラットがありますが、その存在意義も移動ドがわかれば何となく分かるんじゃないでしょうか。

*2: 例えばFダブルシャープは無印のGでいいじゃないか…と言う人がいます。

大抵の場合デフォルトで#になっている音を半音上げる時にダブルシャープ、デフォルトでbになっている音を半音下げ時にダブルフラットが使われます。ダブルシャープ・ダブルフラットも実質は「半音上げる・半音下げる」の役割で使われるのです。

ド ミ ソ ラ ラb ソ

ミ ソ ソ# ラ ド ラ

ダブルシャープとダブルフラットを使った譜面の例。ダブルシャープやダブルフラットも大抵の場合は「(デフォルトの音から)半音上げる・半音下げる」働きで使われているので、実は「全音上げる・下げる」の働きをする事は少ない。

[⑩高度な応用:相対読み(ある程度わかる人向け) この項はスキップして構わない]

移動ドで楽譜を読むと、調性のある音楽は基本的に初見で歌うことが出来るようになります。しかし、臨時記号があまりに多かったり、長調・短調とは違う独特の旋法で書かれた音楽の場合は移動ド読みにしる固定ド読みにしる、対応が難しいと思います。そのヒントを書いてみます。私自身も今のところこれはムリです。

その方法とは直前の音からの距離で次の音の高さを見る。つまり移動ドで培った「音の距離」を直接譜面に見いだしてしまう方法です。

短7 減4(長3) 完4 減4(長3) 短3 増5 長3

脈絡のない譜面の例。初見は困難。

この方法は「度数」の知識が必要ですし、なかなか難しい技術ですが、絶対音感などの能力がない限りこの方法が一番可能性のある方法かなーと思います。

以上で「初見で歌う」はおしまいです。初見力を養えば譜読みの段階から圧倒的に有利になれること間違いなしです。ぜひ練習してみてください。

[⑩補足:移動ド～ドの位置の見つけ方]

「初見で歌う」の補足です。移動ドで読む場合にどこの音を“ド”と読むのかの判別方法です。紛らわしさを回避するため、固定ドでの音名はCDEFGABCで書きます。

★ 無印の調

つまりハ長調、そのままCの音をドとゆめばOKです。

★ シャープ系の調

シャープの調号が付く調の場合の法則は… **一番右側のシャープの付く音が"シ"**と覚えてください。ト音記号でも、ヘ音記号でも、このルールは共通です。

◎シャープだから シと覚えればOKです。

以下はシャープ系のドレミファソラシドの楽譜です。1オクターブの音域しか表示していませんが、もちろんこれより上下の音域も同様です。

The image displays seven musical staves, each representing a different sharp key. The notes are written in a treble clef, and the syllables 'ド', 'レ', 'ミ', 'ファ', 'ソ', 'ラ', 'シ', 'ド' are written below each note. The keys are: 1. C major (no sharps), 2. G major (one sharp: F#), 3. D major (two sharps: F#, C#), 4. A major (three sharps: F#, C#, G#), 5. E major (four sharps: F#, C#, G#, D#), 6. B major (five sharps: F#, C#, G#, D#, A#), 7. F# major (six sharps: F#, C#, G#, D#, A#, E#).

シャープが7つの調は滅多に見かけないし、ハ長調とドレミファソラシドと読む音符の位置も一緒なので（最初がC#ではあるが）省略します。

★ フラット系の調

フラットの調号が付く調の場合の法則は… **一番右側のフラットの付く音が"ファ"**
と憶えて下さい。ト音記号でも、ヘ音記号でも、このルールは共通です。

◎フラットだから ファと覚えればOKです。

以下はフラット系のドレミファソラシドの楽譜です。1オクターブの音域しか表示していませんが、もちろんこれより上下の音域も同様です。

The image displays seven staves of musical notation, each representing a different key signature for the D-E-F-G-A-B-C scale. The notes are written as quarter notes on a treble clef staff. Below each staff, the corresponding Japanese syllables are written: ド (D), レ (E), ミ (F), ファ (G), ソ (A), ラ (B), シ (C), ド (D). The key signatures are: 1. C major (no sharps or flats), 2. F major (one flat), 3. Bb major (two flats), 4. Eb major (three flats), 5. Ab major (four flats), 6. Gb major (five flats), and 7. Cb major (seven flats).

フラットが7つの調は滅多に見かけないし、ハ長調とドレミファソラシドと読む音符の位置も一緒なので（最初がC♭ではあるが）省略します。

★ 大事な注意

譜例は載せましたが、実際に移動ドを考えるときはこの譜例を見ながら書き写すのではなく、自力で考えることを強くオススメします。どうせ憶えることは

★ **一番右側のシャープの付く音が"シ"**

★ **一番右側のフラットの付く音が"ファ"**

のたった2つだけですし、譜例を見ながら書き写すとやはり身に付きませんから…是非移動ドを身につけて、サクサク譜読みが出来る快感を味わってみてください。